



監督＝マーティン・キャンベル
 /出演＝アンジェリーナ・ジョリー／クライヴ・オーウェン／
 ノア・エメリッヒ／テリー・ポロ（日本ヘラルド映画配給／
 2003年アメリカ映画／127分）

難民キャンプで働く青年医師の活動に啓蒙されたヒロインのアンジェリーナ・ジョリーが、① エチオピア、② カンボジア、③ チェチェンでの難民救済活動に大奮闘！ 邦題のとおり、『すべては愛のために』という結末だが、ホントにこんなことができるの……？ という思いがどうしても……。

🎬 すごい邦題

この映画の原題は『BEYOND BORDERS』だから、直訳すれば「国境を越えて」。つまり国際的な立場からの、国境を越えた人道支援活動をイメージしたタイトルだ。しかし、邦題は『すべては愛のために』。これは何ともすごいタイトルだ。新聞の一面を使った宣伝も、トム・クルーズ主演の『ラスト・サムライ』（03年）と並ぶすごいもの。たしかにこの邦題がピッタリという面はある。しかし、どうしても思ってしまうのは、「ちょっと出来すぎ……」ということ。別にこの映画の出来にケチをつけるつもりはないが、① エチオピア、② カンボジア、そして③ チェチェンへと行き、本当に生命を賭けた人道支援活動に……というのはちょっと……？

🎬 浜村淳氏の映画評論では？

大阪には『イグザミナ』という月刊誌があり、ここには『浜村淳の CINEMA プレビュー』という連載がある。そして2003年12月号に、彼が書いた『すべては

愛のために』の映画評論がある。その最初の書き出しは、「感動の佳作である。アクションのおもしろさも充分ある。今年、屈指の見ごたえある映画になった」。そしてラストは「それでも最後は悲痛の涙が止まらない」と絶賛(?)している。しかしその直前には、「映画の製作姿勢はアメリカらしくわかりやすいし通俗的である」ともあり、ホントにこの映画を絶賛しているとも思えない感がある。浜村淳氏が本当にこの映画をどのように評価しているのか、是非その本音を聞かせてもらいたいものだ。

ヒロインはアンジェリーナ・ジョリー

この映画のヒロイン、サラ・ポーフォードに扮するのは、『トゥームレイダー I、II』(01年、03年)で大ブレイクをしている、目の大きなハデなつくりの女優、アンジェリーナ・ジョリー。彼女は若くして裕福なイギリス人、ヘンリー(ライナス・ローチ)と結婚し、息子を1人もうけ、不自由ない生活をしている上流階級の「人種」だ。

そんなサラがある日出かけた、義父の慈善活動の功績を讃えるパーティーで大ショックを受けた。やせ細ったエチオピアの子どもを同行して、このパーティー会場に乗り込んできた青年医師ニック(クライヴ・オーウェン)は、この偽善的なパーティーを罵ったうえ、どうしようもないエチオピア難民のキャンプの実態を荒々しく語り、その本当の救済を訴えたのだった。その結果サラは、「私財」を投げうって、エチオピアへ援助物資を送るとともに、自らもエチオピアへいくことを決意した。

アンジェリーナ・ジョリー自身の人道活動

アンジェリーナは、『トゥームレイダー』の撮影のためカンボジアに滞在した時、難民や貧困にあえぐ現地の人々に出会い、① UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)、② ユニセフ、③ WFP(世界食糧計画)の活動に興味をもち、以降これらの人道活動に精力的に取り組んできた。

当初は「売名行為」と見られるのを避けるため、これらの活動を打ち明けていなかったものの、いつの日からかその活動をライフワークと考えるようになった

彼女は、2001年8月27日付で国連難民高等弁務官事務所の親善大使に任命され、今では公然と誇らし気にその活動を続けている。そのうえ2001年11月には、カンボジアの孤児院にいた0歳児の男の子を養子に迎えたとのこと。これらは、この映画のパンフレットに詳しく紹介されている。

また2003年12月8日の読売新聞（朝刊）の「論点」には米国女優アンジェリーナ・ジョリーの名前による「貧困が紛争の芽を育てる」とした投稿によって、彼女の国連難民高等弁務官事務所としての親善大使の活動をアピールしているくらいだから、これはきっと、ホンモノだと思う。

しかし、このような彼女の親善大使としての活動は理解できても、この映画のヒロインのような、あまりにも過激な行動はどうも……？

最初の舞台はエチオピア

サラの救援活動の最初の舞台はエチオピア。このエチオピアの難民キャンプでサラは多くのことを学んだ。ニックは当初、香水をつけて難民キャンプに乗り込んできた上流階級の人妻に抵抗感を示し、「自己満足と人気取りのために、支援物資を届けに来たのか！」と皮肉タツプリの対応だった。しかし、1人の子どもの命を救うために懸命に働くサラの姿を見るうちに、ニックはその真意を理解し、また自分が失いかけていた純粋な気持をサラに重ねていくようになった。

過激になりがちなニックの相棒はエリオット（ノア・エメリッヒ）。エリオットは時に対立することはあってもニックの良き理解者であり、ニックと二人三脚で困難な活動を続けていた。またエリオットは素直にサラの支援活動を受け入れ、サラの友人として、国連難民高等弁務官事務所に勤めるサラを支えることになった。

第2の舞台はカンボジア

エチオピアでの救援活動を終えたサラはイギリスに戻ったが、もはや普通の生活には飽き足らず、国連難民高等弁務官事務所で働いていた。そんなサラを訪ねてきたのがエリオット。彼はサラの求めに応じて、ニックとともにカンボジアで活動をしていること、そしてここでも多くの支援が必要とされていることを語っ

た。これを聞いたサラは、カンボジアの難民を救うため、またニックに会うため、今度は国連難民高等弁務官事務所勤務という立場も活用しながら、カンボジアの難民支援の活動に赴くことを決意した。しかしカンボジアでは、エチオピアを上回る軍事上の問題や危険があった。そして遂にクメール・ルージュとのトラブルの中、エリオットは……？

第3の舞台はチェチェン

サラとニックはカンボジアでの困難を極める活動の中、一夜限り結ばれた。そしてカンボジアでの活動が終わり、今はまたイギリスの家で暮らすサラには女の子がいた。この女の子の父親は……？

そんなサラの元に、「ニックが今チェチェンで活動している」とのニュースが……。 「ニックに会いたい。そして何としてもニックの活動を支えてあげたい」 そう考えたサラは、矢も楯もたまらず、ニュースキャスターを務める姉のシャロット（テリー・ポロ）に頼み込んで、ついにチェチェンまで。しかしニックとは会えない。ニックは既に人質として、ゲリラ軍に拉致されていたのだった。そんな中、サラがとった行動は……？ ここからまさに『すべては愛のために』という邦題にふさわしい大展開となるが……？

誇大宣伝、前評判倒れ？

私がこの映画を観たのは、祝日の日の夕方。新聞での前宣伝の様子から推測して若い人達を含めてかなりの人気だと思い、わざわざ電話して「混んでないか？」と尋ねたが、大丈夫とのこと。「へー」と思いながら映画館に入ると、何と、中はガラガラ。大きな劇場の中にほんの数千人しか観客はいない。これは一体何だろう？

私自身も前評判ほどこの映画にのめり込んで、大感激することはできなかったが、この観客の少なさは少し異常。今後のこの映画の評価と興行成績を、興味を持ってしっかりと見守りたい。

2003(平成15)年12月24日記